

令和7年度開発調査推進会議報告書

| | |
|-------|------------|
| 会議責任者 | 開発調査センター所長 |
|-------|------------|

- 1 開催日時及び場所 日時 令和8年1月27日(火) 13:00~16:10
場所 東京海洋大学品川キャンパス楽水会館大会議室
(Web併用)
- 2 出席者所属機関及び人数 外部委員7名、学識経験者2名、オブザーバー27名(18機関)、水産庁1名、機構役職員40名(計77名)

3 結果の概要

| 議 題 | 結果の概要 |
|---------------------------|---|
| 1. 開会 | 事業推進役が開会を宣言した。 |
| 2. 挨拶 | 理事長が主催者挨拶を行った。 |
| 3. 資料確認 | 事業推進役が資料の確認を行った。 |
| 4. 委員紹介 | 事業推進役から委員の紹介を行った。 |
| 5. 座長選出 | 規程により、理事長が開発調査センター所長を座長に指名した。 |
| 6. 議事 | |
| (1) 開発調査推進会議の役割について | 開発調査推進会議の役割等について開発調査センター副所長より説明した。 |
| (2) 開発調査の令和7年度実施状況と成果について | グループ・室毎に開発調査等の実施状況と成果について報告し、それに基づいて質疑を行った。 |
| 1) 漁業第一グループの開発調査について | <p>漁業第一グループリーダーから、海外まき網漁業、大中型まき網漁業の各調査について報告した。</p> <p>出席委員からの主な意見と質疑は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外まき網漁業の課題解決に向けた取り組みを続けてほしいとの要望があった。無人航空機については、引き続き外国での活用例の情報を収集し、取り組める課題があれば対応したい、未利用漁場については漁場予測による操業効率化のための取り組みを考えている、エコFADsについては水産庁や業界と協議を進めたいと回答した。 ・VTOLの制御失敗についての質問があり、システム改良の過程で生じた不具合を解消できなかったことを説明した。 ・画像判別による探索技術の進捗状況の質問があり、具体的な到達状況を数値で示すことは難しいものの、この技術が漁業者の魚群探索の補助となるようなものにしたい旨を回答した。 ・大中型まき網の改造漁具の1操業あたりの収益向上評価、大目合化の効果についての質問があり、改良コンセプトである1操業あたりの漁獲量が減っても操業回数を増やす効果は実証できていること、収益性評価について分析中であり、報告書で提示する予定であることを回答した。 |

| | |
|-------------------------------|--|
| <p>2) 漁業第二グループの開発調査について</p> | <p>漁業第二グループリーダーから、遠洋かつお釣漁業、沖合底びき網漁業（八戸地区）、沖合底びき網漁業（室蘭地区）、兼業えび籠の各調査について報告した。</p> <p>出席委員からの主な意見と質疑は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遠洋かつお釣漁業、遠洋まぐろ延縄漁業、沖合底びき網漁業についての調査要望があり、業界と協議しながら新たな取り組みを検討したい旨を回答した。 |
| <p>3) 漁業第三グループの開発調査について</p> | <p>漁業第三グループリーダーから、小型いか釣漁業、中型いか釣り漁業、さんま船によるいか釣漁業、さんま船によるカニ籠漁業の各調査について報告した。</p> <p>出席委員からの主な意見と質疑は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一部の海域で水中灯によるマグロの忌避調査が実施できなかったことは残念との意見があり、今回の結果を関連業界にアピールするなどし、今後の調査への理解を得ることが重要と考えている旨を回答した。 ・スルメイカが着底していることについて海洋環境や資源と関連させて解明してほしいとの要望があり、資源研と連携して解明を進めると回答した。 ・さんま漁船によるアカイカ兼業について、いか釣業界から漁獲情報の交換をしたい旨の発言があり、情報交換を続けるを回答した。 ・いか釣と底びき網で漁獲されたスルメイカの外套長についての質問があり、漁獲日が異なるため成長式を組み込んで補正した旨を説明した。 ・ベニズワイ操業に必要なウインチがさんま漁船にあるのかとの質問があり、油圧ウインチを装備する工事をした旨を回答した。 ・冷凍設備が無いさんま漁船でアカイカ兼業ができるのかとの質問があり、冷凍機が必須であり、冷凍機がないさんま漁船には別の選択肢を提案したいと考えている旨を回答した。 |
| <p>4) 養殖システムグループの開発調査について</p> | <p>養殖システムグループリーダーから、ブリ養殖の調査について説明した。</p> <p>出席委員からの主な意見と質疑は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人工種苗を用いた養殖経営のコストについての質問があり、民間業者の詳細は確認できなかったものの当該業者の通年のブリ養殖全体では黒字であったことを回答した。 ・人工種苗の周年供給に期待するとの意見があり、高成長系統を利用することで周年供給の自由度が増すことを回答した。 ・高成長以外の育種の形質の研究計画についての質問があり、機構では水産庁事業でハダムシや病気に関する形質の研究をしていることを回答した。 |
| <p>5) 実証化企画室の開発調査について</p> | <p>実証化企画室室長から、第6期中長期計画期間の調査方針と具体的な調査計画案について説明した。</p> <p>出席委員からの主な意見と質疑は以下のとおり。</p> |

| | |
|-----------------|---|
| <p>(3) 全体質疑</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・水産庁の基本政策に挙げられた主要テーマと開発調査の対応に関する質問があり、資源評価については漁船データの活用が、規制緩和等についてはいか釣漁業での水中灯活用が、海洋環境の変化については複数漁業種の兼業などが該当する旨を説明した。 ・資源評価では業界と機構の双方向の連携が好ましいとの意見があり、今後は様々な方面との連携を強化する方針である旨を説明した。 <p>出席委員からの主な意見と質疑は以下のとおり。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・海外まき網の素群操業に関する質問があり、沈子側から魚の抜けが抑制できないか検討している旨を回答した。 ・漁場選択と魚群探索に関して、海外まき網と遠洋かつお釣では共通する部分があるので情報共有していきたい旨、発言があった。 ・遠洋かつお釣で省人省力化を進めたい旨の発言があり、業界関係者とも意見交換して将来につながる実証事業をしたい旨を回答した。 ・いか釣の漁場予測モデルについて質問があり、小型・中型いか釣漁船の過去のデータも含めて利用したこと、精度検証を進めていることを説明した。 ・遠洋かつお釣における衛星標識は流れ物があれば必要ないとの指摘に対し、今回は流れ物について魚群を指標として衛星標識の有効性を確認したが、実際の漁場では流れ物についていない魚群を追跡する旨を回答した。 ・船体改造については業界からのフィードバックが必要との意見があり、今回は既存船の改造であったが、最適な船型を設計する際には業界との連携を密にすると回答した。 ・当日欠席の委員からメールにより、引き続き現場ニーズに対応した研究に期待する旨、養殖業の成長に育種技術が必要であり、養殖生産者がブリ優良人工種苗を活用できることを期待する旨のコメントがあった。 |
| <p>7. 閉会</p> | <p>担当理事が閉会の挨拶を行った。</p> |